

2020 年度 小委員会活動成果報告

(2021 年 2 月 3 日作成)

小委員会名	人類学的アプローチ小委員会	主 査 名：大野隆造 就任年月：2019 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学本委員会 (環境心理生理運営委員会)	委員長名：持田 灯 主 査 名：宗方 淳
設 置 期 間	2019 年 4 月 ～2023 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>人間と環境との関係を総合的に扱う環境心理生理研究を支える基本的理論・方法として、これまでに積み重ねられてきた人類学の観点および方法を吟味し、それに基づいて人間に好ましい環境の構築のための新たな研究の道筋を探る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 初年度 1) 人類学的研究状況の把握 2) 構築環境に関わる人類学的研究の理論と思考の整理および事例の収集(文献調査、招待講演) ・ 2 年度～3 年度： 初年度活動の継続および 3) 交流活動の推進(公開研究会・見学会等) ・ 4 年度： 4) 成果の整理、総括 	
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：なし	
	主査：大野 隆造 (東京工業大学) 幹事：諫川 輝之 (東京都市大学) 委員：栗原 伸治 (日本大学)、村松陸雄 (武蔵野大学) 槇 究 (実践女子大学)、 隼田尚彦 (北海道情報大学)、斎尾直子 (東京工業大学)、小林美紀 (東京工業大学)、 山田協太 (筑波大学芸術系)、佐野奈緒子 (東京電機大学)、稲上 誠 (名古屋大学)、 関 博紀 (東京都市大学)、吉澤 望 (東京理科大学)、川井敬二 (熊本大学)	
設置 WG (WG 名：目的)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自然・生態 WG：人類の進化、生態など生物学的な側面で人類共通の特性を扱う研究の理論的枠組みと人類学的思考の整理、および研究事例の収集を行う。 ・ 文化・社会 WG：世界の民族の異なる言語、習慣など文化・社会的な側面で人類の多様な特性を扱う研究の理論的枠組みと人類学的思考の整理、および研究事例の収集を行う。 	
2020 年度予算	150,000 円	ホームページ公開の有無：なし 委員会 HP アドレス：なし

項 目	自 己 評 価
委員会開催数	4 回 (いずれもオンライン開催。年度内計画 2/26 を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会 承認企画	
大会研究集会	

<p>対外的意見表明・パブリックコメント等</p>	
<p>目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)</p>	<p>今年度は、新型コロナウイルスによる感染拡大を受けて、委員会を2WG合同でオンライン開催することとし、討議内容も「新型コロナウイルスによる人間心理・行動への影響に関してどのような人類学的アプローチがありうるのか」という点に急遽変更して出発した。初回は、新型コロナ感染症拡大に伴って体験した身近な問題についての情報交換を行い、第2回は、それらについての人類学的アプローチの観点から意見交換を行った。依然として新型コロナウイルスによる感染が進行中であるため、まとまった内容ではないが、以下のようないくつかの論点が挙げられた：1) オンライン授業や会議における問題（音響の問題、非言語コミュニケーションや共在感覚の欠如）、2) 対人距離、視線交錯、3) フィールドワークでの問題、4) 都市と地方（農村）の受け止め方の地域差異、5) 大学キャンパスの役割、6) 空間の開放性と閉鎖性、7) オンラインによる国際会議のあり方、8) テレワーク（閉じこもり）による健康障害、9) 高齢者施設とコミュニティ。第3回からは、本来の議論に戻り、各委員がこれまでに行ってきた研究のなかで人類学的アプローチと関連する研究紹介を行い、意見交換した。</p> <p>以上より、新型コロナウイルスによって変則的な活動となったが、具体的な課題に対する「人類学的アプローチ」について、委員間である程度認識が共有され、次年度の活動について討議する基盤ができた。</p>
<p>委員会活動の問題点・課題</p>	<p>今年度の新型コロナウイルスによって、当初考えていた議論があまり進まなかった。今後は具体的ないくつかの課題に絞って人類学的な思考の整理、および研究事例の収集を行い議論する必要がある。</p>

2020 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価)

<p>総合評価 (4段階評価)</p>	<p>A</p>
<p>総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)</p>	<p>今年度は当初から、新型コロナウイルスによる感染拡大を受けて、討議の内容を「新型コロナウイルスによる人間心理・行動への影響に関してどのような人類学的アプローチがありうるのか」という点に急遽変更した。そのため、当初考えていた、各委員がこれまでに行ってきた人類学的アプローチと関連する研究の紹介と意見交換はあまり進まなかったが、新型コロナウイルスによる感染拡大によって現れてきた具体的な課題に対する人類学的アプローチについて、委員間で認識が共有され、次年度の活動について討議する基盤ができた。また第2年度の目標としていた「公開研究会・見学会」については、新型コロナウイルス感染拡大の状況下では開催が困難であったので評価にカウントしなくて良いと考える。よって、所期の活動とやや異なる形であったが、十分な成果が得られと考え総合評価はAと判断した。</p>

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価（シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など）に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。